筑紫女学園大学リポジト

胡光墉の倒産と中国生糸の輸出

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦, 惟人, HATA, Korehito メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/282

胡光墉の倒産と中国生糸の輸出

秦　　惟　人

The Bankruptcy of Hu Guang-yong and the Export of Chinese Raw Silk

Korehito HATA

はじめに

胡光墉、字は雪岩(1823－1885)安徽績溪の人で杭州の商人。最近中国では胡光墉の評価が高い。『胡雪岩与曽国藩的知恵』と題して、「経商要学胡雪岩・做官要学曽国藩」と、かれらふたりを並べて経済・政治の処世の手本とする書物や[1]、『中国商道：紅頂商人胡雪岩』[2]と題して胡光墉の事跡を手本に現代の世界の企業の活動の成功要因や教訓、たとえばネスカフェがどうやって日本市場に進出していったかということなどを述べた書物が上海の街角に出回っている。この書物では、「前言」に「『為政要看曽国藩、経商要看胡雪岩』という当今中国社会で流行している言葉は、胡雪岩が中国商人の関心の中の重要な位置を占めていることを表している」として、胡光墉の失敗の要因として、かれの奢侈とともに、かれにグローバルな観点が欠けていたということを指摘し、現代の教訓としているものの、全編は胡光墉の事跡を顕彰する内容となっている。マイナスの観点からの教訓としてとりあげられているのは、胡の失敗の間接的要因として、かれが豪奢にふけり、十二人のめかけをおいて、豪邸を建造したことなどをあげるのみである。『茶葉之道－欧亜商道興衰三百年』という歴史小説の作品でも[3]、ロシアと中国の間の茶貿易にたずさわったロシア商社と比較して、胡光墉の事跡が特記されている。また、『紅頂商人・胡雪岩』と題する上下２冊本の歴史小説も出ている[4]。この小説では、胡光墉の失敗の主因たる生糸投機の失敗について、「胡雪岩は洋商の中国に対する経済侵略に反対し、自己のやりかたで抵抗しようとしたもので、それはすなわちひとりの愛国商人の自尊心をくっきりとあらわしている」[5]と評価し、生糸投機の内容も、イギリス商人が製糸工場を作ろうとしたので、これに抵抗するために、千万両近くの金を出して江浙一帯の糸繭を買い占めて製糸工場の原料繭が手に入らないようにするという愛国・愛民の行動であったとういことになっており、生糸の買占めでなく、繭の買占めという話になっている[6]。そしてかれは淮系の李鴻章と湘系の左宗棠との争いのなかで、李鴻章に敗れ去ったものとして描かれている。このような胡光墉ブームの背景には、「振興中華」によって示されナショナリズムの高揚があると思わる。胡光墉は列強によって脅かされる中国の商業を守って闘った人物として描かれているようである。

胡光墉の評価に関しては、最も包括的な研究を残したスタンレイは、胡光墉を古い広東行商が没

落し、新しい商人企業家が生まれる前の中間的存在と位置づけ、広東行商と胡光墉は官と結びつく点では似ているが、胡は官の身代わりではないこと、血縁の背景やギルドとの関係を持たず、左宗棠との個人的結びつきに拠っていることのふたつを広東行商との違いとしてあげている。一方、胡光墉は後の時代のような新しい生産分野や企業に入っていく意志も能力もなかった点で、伝統的な存在であったとみなしている[7]。胡光墉が「愛国商人」であったかどうかはともかく、かれが1870年代から80年代という時期において、どのように位置づけられるのか、かれの失敗の主因となった生糸投機と、中国生糸の輸出の転換に焦点をあてて、ここでは考えてみたい。

Ⅰ　胡光墉とその官商活動

1．王有齢・左宗棠との出会い

胡光墉は1823（道光３）年安徽省績溪県で生まれたが、生家は貧しく、浙江省金華の蔣姓の商人が、かれが利口で誠実なのを見て、金華のハム屋の奉公に紹介した。金華では銭荘の仕事に興味を持ち、19歳の時に杭州の開泰銭荘の学徒となった。そこで年季より早く「跑街」（外交係）[8]に昇進し、24歳の時には店主の捐納により「道員」の資格をもらった。三年後には店主の死去により開泰銭荘の経営を託されたという[9]。そこで官吏との結びつきが生まれ、地方小官であった王有齢が北京に行くための資金を融通したという。王は北京で皇帝への謁見がかない、どんどん出世して[10]、咸豊５（1855）年には杭州知府、７年には江蘇按察使から布政使、そして10年にはついに浙江巡撫に抜擢された[11]。王はまた、胡光墉が阜康銭荘を開設するのを助けた[12]。ところが咸豊11（1861）年９月、太平天国軍の李秀成と李世賢が杭州を包囲し、12月29日には太平軍が杭州に入城した[13]。この敗戦で王有齢は服毒するも果たせず自縊によって死亡した[14]。翌年左宗棠が王の後任となった。杭州陥落前、胡光墉は上海から武器・軍糧を送ろうとしたが果たせず、結局左宗棠に引き渡した[15]。こうして王有齢に続いて左宗棠との結びつきが始まった。左宗棠が浙江巡撫になると、まもなく胡光墉は軍糧の管理官に任ぜられた[16]。左は浙江を奪回するために衢州から作戦を開始し、同治２（1863）年４月には閩浙総督を授けられ、浙江巡撫を兼ねた。そして同治３年（1864）年２月には杭州を太平天国から奪回した[17]。この間胡は左宗棠の作戦のために物資や外国製武器の調達に当たった。杭州奪回作戦では死者は数十万を数え、死体や白骨が累々としていた。胡光墉は各紳士らと民夫を雇い、大きな塚を作ってこれらを葬った[18]。こうした善後の活動により、按察使銜福建補用道になっていた胡光墉に布政使の銜が加えられた[19]。

左宗棠は同治５年に福州に局を設けて汽船を造るよう奏請し[20]、福州の馬尾船政局が創設された。左はこの局を沈葆楨に主事させるよう推薦したが、まもなく左はイスラム教徒の反乱に対処するため陝甘総督に転任して10月に西に向かって出発した[21]。しかし沈葆楨は服喪のために着任せず、胡光墉が実務にあたった[22]。10月23日には胡光墉は正副監督のジケル・デグベルとともに福建に来て、すでにフランスの上海総領事ベルニーの保証を得た取りきめを左宗棠が認め[23]、事業が開始された。翌年には沈葆楨が総理船政大臣となって船政局の仕事にあたった。

2．上海転運局と西征借款

左宗棠が陝甘総督となって陝西・甘粛のイスラム教徒の反乱鎮圧および新疆の平定に乗り出すと、そのための軍事費や食糧、および西北における灌漑や開墾の事業、蘭州の毛織物工場設立などの洋務企業の資金や資材の調達は胡光墉が担うことになった。1867年、上海に転運局が設けられると、胡は左から采弁転運局委員を委ねられ、物資と資金の輸送にあたった。上海から西北への物資と資金の輸送ルートは、上海から漢口まで汽船で入り、そこには、陝甘後路糧台が設けられていた。漢口からは漢江を汽船で遡って襄陽に至り、そこに水陸転運総局を置く、そこから水陸二路を通って西安に至る。このルートでの送金には山西票号も利用されたが、それは少なく、送金は胡光墉の手を経て送られた。西北への軍資金は東南部の広東・福州・寧波・上海の海関から来たからである[24]。それらは、主に海関の関税（洋税）を担保に、中国で活動する外国の銀行や商社から融資されていた。

左宗棠の活動した陝西・甘粛、そして新疆という西北の地域は赤字の地方であった。ちなみに地方から徴収する清朝の財政は３つに分けられる。存留はその省の費用、解京は中央政府送金分、協餉は他省に直接送る部分である。たえず余剰が出る省は長江流域と沿海部で、広東・広西・福建は収支バランスがとれ、西北・西南の各省は赤字であった[25]。それに陝甘総督は権限が限られ、いくつかの省は以前の義務を拒否した[26]。そこで左宗棠は西北に行くに際して、采弁転運局委員の胡光墉に命じて上海の商社から120万両を借りようとした。これが第１次の西征借款である[27]。同治６年３月、胡光墉は外商と120万両の借款に合意し、これにはいくつかの海関の洋税が担保になった。その内訳は、福建の海関が24万両、広東が24万両、浙江の海関が42万両、上海が18万両、漢口が12万両であった。この年の年末（1868年）、200万両の第２次西征借款がおこされた。担保は、西南の海関で、内訳は上海が30万両、浙江が70万両、福建40万両、広東40万両で、他に甘粛・浙江・湖北・山東の協餉から32万両で合計212万両、12万両が６％の利子にあたる[28]。

その後、西征のための外債は同治年間には組まれなかった。左宗棠は厘金を経費に充当しようとしたが、厘金をたくさん納めている豊かな地域に地盤をおいている李鴻章の反対にあって実現しなかった。そこで左宗棠は、蘭州・西安・漢口・上海といった、西北への輸送ルートの各地の中国商人から借入することとした[29]。同治11年初、左は楊昌濬にあて、協餉が入らないので、沈葆楨が中国商人から24万両を借りたことを間接的に知ったこと、漢口で10万両を借り、胡光墉が14万両を借りたのは、左が蘭州に来てから旧来の滞納分が集まらず、困窮しているからであると伝えている[30]。協餉の不足や滞納分を胡光墉などを通じて借入でまかなっているという窮状がわかる。

同治13（1874）年、日本が台湾に出兵して、沿海部からの協餉がますます入らない事態がおこった。そこで胡光墉は外国借款によって窮状をしのごうと提案したが、左宗棠は、日本のことは沈葆楨が処理しているから、外国からの借款は沈葆楨にかわりに余分に借りてもらって、自分に分けてもらい、自分から返済するようにしようと提案した[31]。福州船政局が防衛活動の任にあたり、かれは香港上海銀行から200万両を借入した。利子は８％で、毎年10の海関から20万両ずつ返済することとした。こうして福建台防借款が成立した。これをうけて翌光緒元年左宗棠は沈葆楨に1000万両の外債を提案したが、李鴻章だけでなく沈葆楨も反対した[32]。沿海の防衛を担当していた沈葆楨は

西征のため巨額の借款には同意できなかったのである。このころ問題になっていた李鴻章と左宗棠の間の塞防海防論争は、なにより財源をめぐる争いだったのである。しかし、翌年３月になると、胡光墉はオリエンタル銀行から200万両、ジャーディン・マセソン商会から100万両を借りるようとりつけた[33]。これが第３次西征借款である。第４次西征借款も左宗棠が旧債の返済を新債を以ってあてたために胡光墉に要請して成立した。すでに光緒２年春、左は500万両の洋借を奏請していたが[34]、翌年ようやく成立した。光緒６（1881）年、サンクト・ペテルブルクでイリ条約が結ばれ、新疆のことは一段落した。左宗棠は兵士への報酬６百万両と、未返済の借款のための２百万両が必要と見積もり、半分の４百万両を香港上海銀行から利子８％、５年返済で借りるよう胡光墉に注文した。これらは左の後継者の劉錦堂と譚鍾麟が返済した[35]。このように、胡光墉は西征借款において中心の役割を果たした。その業務は、協餉など官金の送金、関税を担保とする外国からの借款の二つに分けられる。従来、官金の送金は主に山西票号が担ってきたが、そこに胡光墉が参入した。この仕事によって官商となった理由は、より大きな役割である外債の仲介を引き受けたことによる。それは胡光墉が銭荘の設立から海関の収入を受け付ける金融機関に乗り出したことによって可能となった。

３．胡光墉と海関銀号

胡光墉は王有齢の援助で開泰銭荘から独立して阜康銭荘を創業したが、「阜康銭荘は最盛時には上海・寧波・漢口・北京等10余か所に分号を設け、北京の預金額はいちばん多い時には8000万両に達し、預金者はみな豪門巨富で、たとえば光緒帝の叔父で刑部尚書の文煜は数十万両の預金をしていた。また、その巨資によって、典当（質屋）や生糸と茶の輸出貿易を経営した。かれが開設した典当は分かるだけで20余軒あり、杭州・寧波・嘉興・金華・蘇州・鎮江等の都市に及んだだけでなく、湖州の新市鎮・海寧の硤石鎮・杭州の塘栖鎮等の小鎮にも深く入っていった」[36]。また、胡光墉が倒産した光緒９（1883）年の時点で、かれには上海阜康銀号・阜康雪記銭荘・杭州阜康銀号・泰来銭荘・寧波通裕銀号・通泉銭荘・福州裕成銀号・漢口乾裕銀号・北京阜康福記銀号があったとされる[37]。ここにあるうち開港場でない杭州と北京以外の多くのものは銀号を名乗っており、海関銀号の業務をしていたと考えられる。

五港開港の時、旧来の公行が廃止され、関税については銀号を作ってそこに関税を払うと定められた。最初の海関銀号は広東の海関監督から委任された高洪利とされるが、かれは公行商人ではない。その後も保守的な公行商人にかわって、公行以外の商人が海関銀号を運営した[38]。洋税が成立すると、外国人税務司制度により、関税の徴収は外国人税務司が管理したが、徴収銀は中国側の海関監督のもとにあって海関銀号が管理・送金に携わった[39]。海関銀号は官銀号ともいい、1878年の時点で、19の開港場に21の海関銀号（牛荘と漢口は２つ）があった。そのうち６つは胡光墉の海関銀号で、漢口の乾裕銀号・上海の阜康銀号・寧波・温州・アモイと福州の海関銀号があった[40]。他の海関銀号のうち天津は1877年からは広東商人でラッセル商会の買弁陳徳光のもので[41]、汕頭や広東など南方の港は広東人のものが多かった[42]。西征借款が胡光墉の手を通じておこなわれたのは、かれが海関銀号を経営していたからだということができる。岡本氏が「西征の軍費調達において、

外国からの借款がかならず、胡光墉の仲介を通じ、広東・江蘇・浙江・湖北・福建の海関で実施されたのは、かれの金融業の展開と密接にかかわっていたとみなすことができる。そのうち広東からの送金のおくれがめだつのも、同省の条約港にかれの企業がまったく参入していなかったところから説明できよう」と述べるように[43]、かれは外債の仲介とその償還を手がけることによって、山西票号とならんで官金の送金に参入していったのである。

4．胡光墉の倒産

光緒９（1883）年、杭州の泰来銭荘が10月16日に倒産し、11月２日に上海阜康銀号も倒産し、各地の阜康銀号もこれに続き、ついに胡光墉の事業はすべて崩壊した[44]。胡光墉の事業のうち、今も当時の姿をとどめているのは、同治13（1874）年に杭州の大井巷に設立し、光緒４（1878）年に正式開業した胡慶余堂国薬号という薬局のみである[45]。この薬局は、胡光墉破産の時にかれを弾劾した文煜の所有となっていたが、文煜は清朝の皇親であるため、辛亥革命後に没収され、寧波幇の商人王暁籟等の手に渡っていった[46]。

胡光墉は官金の送金をやっているほか、経営規模や範囲が広大なので、その倒産の影響ははかり知れなく、1883年中国の金融恐慌を引き起こすこととなった。各地では銭荘など金融機関の倒産が相次いだ。上海では、この年（1883年）初めには78行の地元在来銀行があったが、年末にはたった10行になった[47]。鎮江では、20から30の銭荘があって、おおむね経営良好であったが、投機による現金の逼迫によって小さなものはみな倒壊し、10～12行を残すのみとなった[48]。北京でも取りつけさわぎがおこり、北京の阜康銀号は閉鎖された。ここには文煜など大官僚の預金だけでなく、胡光墉が公金の送金を扱っていたことから、公金も預金されていた。公金が直接影響を受けたことにより、この金融恐慌はより深刻なものとなった。大商人・大買弁で洋務企業に深くかかわっていた徐潤の宝源祥房産公司も、不動産経営の逼迫によって倒産した[49]。濱下氏は「この年の上海における金融恐慌は、⑴投機の破綻による信用の崩壊、⑵生糸輸出の減少による市場流通資金の不足、⑶輸入貿易の不振、⑷清仏戦争による政治不安、などによって発生し、それらに加え、外国銀行と山西票号とが、融資拒否、資金回収を行ったため、金融恐慌が深刻化した」[50]と指摘し阜康銀号の倒産が全国各地に金融恐慌を波及させたと述べている。

1883年の金融恐慌は、徐潤の倒産にも見られるように、おりから進められていた洋務運動にも深刻な影響を与えた。鈴木智夫氏は、1883年金融恐慌によって多くの官督商弁企業がつぶれ、以後企業に対する官の干渉が強化されたと指摘している。たとえば、上海機器織布局では、それまで経営を一手に担ってきた総弁の鄭観応が辞任を余儀なくされ、織布局開業の事業が頓挫したことや、輪船招商局の総弁であった徐潤が失脚し、新設された督弁に李鴻章の腹心の部下盛宣懐が就任したように、1883年を、洋務企業が「民」から「官」へ転換する画期とみなしている[51]。

この年の金融恐慌の発火点で波及原因でもあったのが、胡光墉の倒産である。かれの倒産の要因はいくつかある。祈舟氏によれば、胡光墉は生活が派手で、企業経営にも影響し、経営管理上も細かい計算に注意しなかったため、阜康銭荘と胡慶余堂は連年欠損を出すようになっていた。そして全面崩壊の直接の原因となったのは、生糸の経営で外商との競争に惨敗したことであった。かれは

1881年から大量の生糸を買い占め、いちどに７・８千包から一万包以上、数百万両を買い占め、市場の独占によって生糸価格をつりあげようとしたが失敗した[52]と述べている。胡光墉が外商と闘ったということで、現在の中国でもかれの評価が高いわけであるが、生糸の輸出価格の低下は、市場操作ではどうにもならない趨勢であった。かれが国際市場情勢に疎かったことは指摘されているが、その市場情勢とは、単なる価格競争ではなく、1870年代から80年代の国際経済環境の転換があったと考えられる。次章では、生糸の輸出動向や中国製糸業の転換を見ることによって、この国際経済情勢の転換について考えたい。

Ⅱ　生糸をめぐる国際経済の展開

１．中国生糸の輸出動向

かつて筆者は旧稿で1860年代末から1900年代半ばまでの中国生糸の輸出、とりわけ上海から輸出される湖産の土糸[53]の輸出動向について考えた[54]。その際、生糸の輸出量の動向に注目して、「1880年代が湖糸の全盛期だった」[55]と述べた。生糸価格については、杉山伸也氏の研究[56]に依拠して、1870年代以降は中国生糸の価格変動がフランスのリヨンの市場価格と連動するようになったことを指摘し[57]さらに上海市場の四等七里糸の価格が1872年から74年にかけて１梱（80斤）あたり500両から320両に急落したことを示す表を掲げながら[58]、生糸価格の動向にはあまり注目しなかった。開港後の中国生糸の輸出については、今世紀に入ってからも、楊纓氏の研究があるが、これは1870年代前半中国生糸輸出の転換の前についての分析である[59]。そこで今回は1870年代から80年代にかけての生糸価格の動向と、1880年代に始まる中国製糸業の転回に焦点をあてて中国生糸の輸出動向を見ていきたい。次ページの《表１》およびその次の《表２》は、1860年代末から1910年代後半までの中国の生糸・絹製品の輸出量と輸出額である。輸出入金額については、従来輸入が過多に、輸出が過少に計算されていたので、1904年には計算方法が修正された[60]。しかし本稿の表では海関報告に記載された数値をそのまま掲載しているので、誤差はまぬがないと考えるが、もともと海関報告には二重計算などがあるので、元のままの数値で論ずることにする。これらの表を見ると、土糸の輸出量のピークは1890年代初頭であることがわかる。1870年代後半にもピークがあるようにみえるが、土糸の統計方法は1886年から変わり、白糸と黄色糸が分けられているので、すぐに見るように、白糸と黄糸を合わせた「土糸合計」の数値で比較する必要がある。つぎに器械糸は1894年から統計に現れるが、すでに1870年代には広東で、80年代には上海でも生産・輸出が始まっていた。その輸出量は20世紀に入るころ白糸土糸を上回るようになり、輸出価格では、1897年に白糸を逆転している。土糸と器械糸の輸出の比較を現したのが、《グラフ１》および《グラフ２》である。これを見ると、胡光墉が破綻した1880年代前半に、特に輸出額が急落していることがわかる。

次に、土糸・器械糸以外の品目について簡単にみると、野蚕糸や山東柞蚕糸は増加し、特に1886年から登場する山東の柞蚕糸は十倍に増加している。まゆ・屑繭と屑物も同様に増加している。再繰糸も僅かながら登場し、1910年以降はかなりの数量を示している。これについて旧稿では「再繰糸は、土糸が世界市場に生きのびようとする自己変革のひとつ」[61]と述べたが、1910年以降の統計

《表１》中国歴年生糸類主要品目輸出量　　単位：担（絹織物は匹）

年次	白糸及撚糸・白糸	黄糸	野蚕糸	再繰糸	器械糸・白	まゆ・屑繭	屑物	絹織物	山東柞蚕糸
1867	39, 627		5, 363			573	2, 632	4, 008	
1868	50, 800		6, 546			1, 783	4, 801	3, 568	
1869	43, 701		4, 693			1, 484	3, 288	3, 383	
1870	45, 816		3, 345			1, 846	4, 880	3, 791	
1871	55, 863		3, 665			1, 936	7, 404	4, 490	
1872	63, 193		2, 148			2, 358	7, 669	5, 302	
1873	54, 003		7, 290			2, 707	8, 745	5, 149	
1874	68, 350		6, 399			1, 686	8, 749	5, 778	
1875	74, 183		5, 762			3, 071	8, 583	6, 468	
1876	76, 291		3, 095			3, 199	10, 331	5, 889	
1877	56, 236		3, 030			2, 356	8, 587	6, 460	
1878	63, 143		4, 200			2, 304	11, 496	7, 440	
1879	75, 829		4, 716			3, 889	13, 995	6, 920	
1880	78, 100		4, 101			4, 552	18, 861	8, 390	
1881	60, 483		5, 199			4, 551	27, 817	7, 188	
1882	60, 492		4, 089			3, 847	28, 658	6, 598	
1883	59, 143		5, 837			2, 662	28, 498	7, 731	
1884	61, 140		6, 652			2, 618	35, 002	8, 808	
1885	50, 133		7, 871			1, 342	30, 907	10, 279	
1886	56, 632	7, 759	12, 555	48		5, 388	50, 319	10, 254	2, 241
1887	59, 589	7, 105	12, 041	10		10, 980	59, 745	11, 973	2, 211
1888	54, 704	8, 939	13, 129	11		8, 854	53, 826	14, 181	1, 855
1889	65, 517	9, 264	17, 827	151		14, 167	59, 456	12, 780	1, 901
1890	50, 599	9, 777	19, 980	48		10, 537	55, 111	9, 858	1, 282
1891	74, 489	10, 460	17, 043	13		10, 119	60, 704	11, 886	1, 280
1892	75, 722	9, 032	16, 433	14		6, 540	55, 891	13, 111	2, 751
1893	68, 052	12, 345	13, 759	10		9, 635	57, 614	14, 611	2, 524
1894	68, 926	9, 934	16, 241		4, 344	9, 631	66, 475	16, 363	2, 718
1895	56, 258	11, 345	15, 942		27, 056	24, 060	56, 744	20, 501	2, 621
1896	38, 223	6, 775	16, 370		27, 041	17, 845	44, 937	18, 260	2, 590
1897	48, 468	7, 610	19, 046		41, 458	20, 145	58, 350	18, 438	1, 963
1898	43, 536	7, 746	16, 489		41, 050	18, 584	71, 339	17, 537	1, 782
1899	59, 845	14, 146	24, 678		49, 435	21, 878	91, 254	15, 670	2, 418
1900	31, 796	11, 267	18, 867		35, 277	18, 793	60, 182	15, 844	2, 453
1901	45, 090	13, 669	20, 499		49, 938	18, 228	66, 044	17, 958	2, 737
1902	37, 426	12, 536	19, 179		50, 557	25, 397	72, 436	16, 145	4, 483
1903	19, 341	9, 375	22, 128		43, 979	36, 309	79, 882	14, 708	5, 499
1904	34, 238	10, 374	33, 527		42, 287	25, 734	66, 893	18, 080	3, 487
1905	24, 270	10, 718	25, 584		45, 347	35, 013	87, 167	12, 390	3, 337
1906	27, 224	11, 886	25, 555		45, 821	28, 578	74, 227	11, 755	3, 742
1907	28, 556	13, 405	23, 896		50, 296	36, 367	107, 859	14, 635	5, 843
1908	31, 926	13, 816	34, 148		49, 206	41, 807	83, 789	16, 577	6, 247
1909	30, 535	13, 564	34, 011		51, 674	36, 316	83, 953	17, 751	10, 655
1910	10, 774	15, 876	29, 042	19, 565	63, 969	55, 891	110, 226	17, 142	12, 854
1911	12, 011	13, 488	33, 831	15, 179	55, 416	59, 165	118, 081	16, 837	11, 236
1912	20, 876	19, 414	21, 299	22, 429	56, 678	59, 123	103, 635	16, 424	12, 115
1913	11, 617	17, 633	29, 053	20, 553	68, 342	51, 518	116, 860	17, 751	16, 749
1914	6, 491	14, 659	20, 969	9, 583	54, 016	36, 300	81, 704	13, 613	14, 269
1915	6, 780	13, 145	9, 779	24, 950	59, 762	76, 138	118, 049	16, 382	24, 776
1916	5, 947	13, 867	5, 517	13, 650	65, 813	73, 296	139, 612	14, 855	24, 266
1917	4, 612	14, 492	3, 926	14, 076	69, 003	61, 425	114, 828	12, 981	17, 228
1918	4, 159	12, 361	5, 261	14, 454	60, 994	75, 885	128, 718	14, 787	19, 772
1919	4, 468	18, 669	5, 691	16, 729	83, 470	65, 126	115, 295	17, 719	21, 745

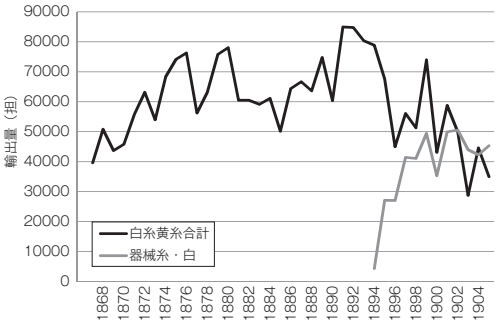
出典：歴年海関報告　Reports on Trade at the Treaty Ports 1868−1885 part Ⅰ p.10, Retens of Trade and Trade Reports 1886−1905 part Ⅰ pp.10−13, Retens of Trade and Trade Reports 1906−1911 part Ⅰ pp.27−30, Retens of Trade and Trade Reports 1912−1919 part Ⅰ pp.78−96

《表２》中国歴年生糸類主要品目輸出額（単位：海関両）

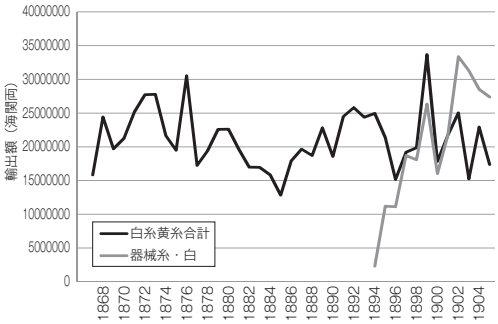
年次	白糸及撚糸・白糸	黄糸	野蚕糸	再繰糸	器械糸・白	まゆ・屑繭	屑物	絹織物	山東柞蚕糸
1867	15, 860, 564		511, 954			39, 598	113, 924	2, 172, 320	
1868	24, 420, 790		688, 095			102, 855	274, 879	1, 947, 258	
1869	19, 709, 543		503, 299			94, 333	173, 614	1, 695, 259	
1870	21, 269, 144		371, 452			104, 904	227, 387	1, 896, 294	
1871	25, 174, 297		294, 825			109, 169	374, 056	2, 352, 781	
1872	27, 719, 030		181, 714			152, 356	398, 743	2, 607, 052	
1873	27, 777, 866		511, 015			250, 873	460, 115	2, 203, 342	
1874	21, 673, 967		449, 275			235, 587	480, 492	2, 644, 887	
1875	19, 489, 225		618, 053			241, 015	349, 991	4, 022, 538	
1876	30, 542, 016		366, 183			251, 956	493, 736	3, 986, 038	
1877	17, 257, 883		365, 190			208, 223	303, 076	4, 432, 121	
1878	19, 418, 757		410, 042			129, 619	416, 919	4, 507, 047	
1879	22, 596, 481		409, 466			250, 257	616, 184	4, 498, 992	
1880	22, 604, 465		385, 876			238, 222	947, 393	5, 421, 721	
1881	19, 614, 716		509, 441			298, 503	1, 594, 396	4, 612, 273	
1882	16, 980, 881		344, 720			207, 523	1, 356, 826	3, 396, 374	
1883	16, 959, 264		510, 974			182, 870	1, 605, 361	4, 022, 749	
1884	15, 847, 212		609, 463			118, 906	1, 730, 241	4, 426, 973	
1885	12, 846, 074		723, 983			60, 401	1, 625, 488	4, 556, 470	
1886	16, 644, 248	1, 267, 647	1, 288, 655	9, 502		350, 482	2, 291, 066	6, 403, 649	351, 059
1887	18, 139, 990	1, 515, 624	1, 083, 830	1, 249		619, 199	3, 247, 951	6, 384, 059	339, 090
1888	16, 792, 041	1, 916, 109	1, 360, 881	1, 320		500, 881	3, 194, 235	7, 596, 922	297, 065
1889	20, 835, 854	1, 995, 725	1, 961, 615	18, 068		392, 110	3, 049, 046	6, 874, 690	300, 348
1890	16, 756, 668	1, 830, 899	2, 032, 408	5, 808		745, 186	3, 120, 401	5, 119, 436	201, 378
1891	22, 109, 749	2, 405, 742	1, 513, 670	645		590, 686	3, 263, 883	6, 262, 654	202, 035
1892	23, 810, 567	2, 032, 232	1, 479, 225	869		414, 455	2, 603, 745	6, 899, 906	471, 944
1893	21, 847, 170	2, 537, 757	1, 402, 577	985		617, 583	2, 920, 083	7, 847, 498	405, 589
1894	22, 972, 894	1, 982, 666	1, 967, 138		2, 324, 254	645, 377	3, 739, 506	7, 980, 124	435, 425
1895	19, 139, 947	2, 258, 490	1, 967, 038		11, 210, 167	1, 082, 742	3, 065, 487	10, 910, 996	419, 701
1896	13, 285, 843	1, 894, 784	2, 403, 827		11, 126, 022	858, 950	2, 102, 114	9, 133, 439	589, 814
1897	17, 441, 327	1, 773, 815	3, 059, 157		18, 718, 378	835, 294	2, 633, 019	9, 674, 959	419, 788
1898	17, 687, 403	2, 186, 027	2, 805, 332		18, 102, 667	890, 141	3, 741, 248	9, 677, 295	367, 283
1899	29, 103, 683	4, 580, 363	5, 226, 527		26, 334, 883	1, 333, 122	5, 004, 271	9, 325, 997	566, 531
1900	14, 522, 793	3, 334, 198	2, 659, 512		16, 038, 647	1, 088, 774	2, 088, 107	8, 344, 490	683, 561
1901	17, 602, 721	4, 136, 620	2, 821, 508		21, 807, 230	994, 308	2, 664, 895	9, 542, 552	684, 226
1902	20, 620, 220	4, 434, 135	3, 701, 522		33, 372, 412	1, 822, 984	3, 002, 807	8, 400, 801	1, 250, 907
1903	11, 603, 379	3, 649, 601	4, 673, 432		31, 284, 941	3, 106, 771	5, 016, 637	12, 096, 173	1, 688, 737
1904	19, 581, 790	3, 357, 323	9, 861, 668		28, 526, 115	1, 346, 204	3, 014, 202	10, 600, 800	1, 162, 568
1905	13, 524, 010	3, 866, 402	8, 639, 062		27, 395, 999	1, 900, 104	4, 288, 525	8, 897, 627	1, 041, 123
1906	16, 485, 481	3, 214, 873	6, 372, 970		29, 614, 449	1, 540, 126	3, 208, 162	8, 474, 750	1, 279, 104
1907	17, 804, 464	4, 746, 366	6, 292, 933		39, 047, 350	1, 872, 071	5, 439, 771	10, 602, 514	2, 323, 638
1908	17, 714, 088	4, 524, 469	7, 571, 555		32, 318, 344	1, 976, 395	4, 229, 496	11, 340, 667	2, 386, 674
1909	15, 382, 811	4, 459, 030	9, 846, 308		34, 340, 742	2, 453, 532	4, 671, 041	12, 136, 900	5, 754, 809
1910	4, 764, 603	5, 035, 610	8, 023, 439	11, 021, 281	42, 701, 436	2, 830, 207	5, 950, 112	12, 685, 374	5, 313, 305
1911	5, 447, 774	4, 739, 842	9, 182, 617	8, 784, 403	36, 779, 594	2, 893, 965	6, 681, 489	12, 426, 200	4, 624, 671
1912	7, 919, 621	5, 906, 131	4, 410, 493	10, 457, 372	34, 377, 497	3, 366, 119	5, 487, 364	11, 470, 197	4, 633, 590
1913	4, 879, 365	4, 866, 266	6, 983, 583	10, 547, 082	45, 602, 397	2, 973, 879	6, 672, 728	14, 325, 709	6, 638, 069
1914	2, 811, 367	4, 439, 073	4, 072, 777	5, 552, 127	37, 384, 485	2, 332, 224	5, 025, 679	10, 872, 421	5, 119, 222
1915	2, 774, 112	3, 936, 142	1, 477, 042	13, 371, 592	40, 189, 097	3, 578, 715	5, 749, 437	12, 850, 970	8, 707, 103
1916	2, 760, 707	4, 563, 117	1, 042, 761	9, 062, 008	53, 770, 546	3, 581, 768	8, 198, 225	12, 206, 588	7, 813, 378
1917	2, 190, 748	4, 572, 552	921, 877	9, 660, 543	53, 301, 251	2, 532, 540	6, 505, 409	10, 904, 546	6, 325, 220
1918	2, 066, 366	4, 080, 101	1, 245, 212	9, 059, 046	47, 469, 888	3, 723, 923	9, 228, 715	12, 761, 809	6, 149, 438
1919	2, 242, 541	5, 842, 445	1, 376, 198	10, 408, 992	69, 364, 080	3, 426, 575	7, 982, 445	15, 744, 583	7, 515, 645

出典：歴年海関報告　Reports on Trade at the Treaty Ports 1868−1885 part Ⅰ p.10, Retens of Trade and Trade Reports 1886−1905 part Ⅰ pp.10−13, Retens of Trade and Trade Reports 1906−1911 part Ⅰ pp.27−30, Retens of Trade and Trade Reports 1912−1919 part Ⅰ pp.78−96

《グラフ１》土糸合計と器械糸の輸出量



《グラフ２》土糸合計と器械糸の輸出額

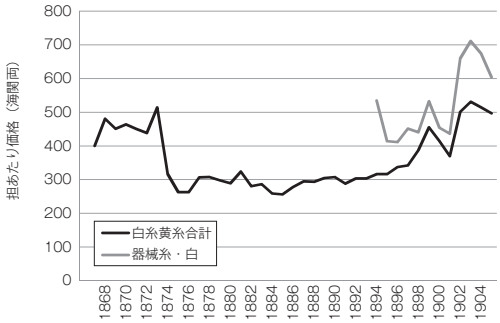


を検討しなかったので、実態の分析には至らなかった。古田和子氏は、中国の再繰糸を、日本のものと比較し、日本の信州諏訪などが器械糸の中心となった一方、上州は座繰糸を再繰糸に加工したことに触れ、両国の再繰糸の生産・流通に関して分析している[62]。

２．中国生糸の輸出の転回点

中国蚕糸業が1870年代前半に転回点を迎え、上海では80年代前半に器械製糸が生まれたことは、よく知られている。次の表３は主要品目別の担あたり価格、下のグラフ３は土糸合計と器械糸の担あたり価格を示したものである。

《グラフ３》土糸合計と器械糸の担あたり価格



《表３》によれば、土糸合計の価格が1873年の514両余から1875年の262両余と49％余も低下していることが分かる。その後19世紀末に至るまで400両の大台を回復することはなかった。この転回点について、同治11（1872）年の『申報』の報道では、生糸の中に悪い品質のものが混じっていることや日本の生糸との競争によって、100両につき25両も価格が下がっていることが伝えられ[63]、翌年には、ヨーロッパ商人が、中国生糸は良悪が混じっているので、これが改められなければ、日本・イタリア・フランスのものの方を購買するであろうと報じられている[64]。この年、上海の湖糸の価格は前年の500～520両から400～405両に下がっていること、その原因として、ひとつにはヨーロッパの絹織物が精巧になって必ずしも湖糸を用いなくてもよいようになり、以前は糸価が高すぎたので値下がりしたこと、もう一つは外国の絹織物が横糸は細い生糸を用いるが、縦糸は他物を使うようになって太い糸の需要がなくなり、細糸しか重要しなくなったことをあげている[65]。アメリカで

《表３》中国歴年輸出生糸糸類主要品目別価格（担あたり・絹織物は匹あたり・海関両）

年次	白糸及撚糸・白糸	黄糸	白糸黄糸合計	再繰糸	器械糸・白	まゆ・屑繭	屑物	絹織物
1867	400.25		400.25			69.11	43.28	542.00
1868	480.72		480.72			57.69	57.25	545.76
1869	451.01		451.01			63.57	52.80	500.21
1870	464.23		464.23			56.83	46.60	500.21
1871	450.64		450.64			56.39	50.52	524.00
1872	438.64		438.64			64.61	51.99	491.71
1873	514.38		514.38			92.68	52.61	427.92
1874	317.10		317.10			139.73	54.92	457.75
1875	262.72		262.72			78.48	40.78	621.91
1876	262.72		262.72			78.76	47.79	676.86
1877	306.88		306.88			88.38	35.29	686.09
1878	307.54		307.54			56.26	36.27	605.79
1879	297.99		297.99			64.35	44.03	650.14
1880	289.43		289.43			52.33	50.23	646.21
1881	324.30		324.30			65.59	57.32	641.66
1882	280.71		280.75			53.94	47.35	514.76
1883	286.75		286.75			68.70	56.33	520.34
1884	259.20		259.20			45.42	49.43	502.61
1885	256.24		256.24			45.01	52.59	443.28
1886	293.90	163.38	278.17	197.96		65.05	45.53	624.50
1887	304.42	213.32	294.71	124.90		56.39	54.36	533.20
1888	306.96	214.35	293.95	120.00		56.57	59.34	535.71
1889	318.02	215.43	305.31	119.66		27.68	51.28	537.93
1890	331.17	187.27	307.86	121.00		70.72	56.62	519.32
1891	296.82	229.99	288.59	49.62		58.37	53.77	526.89
1892	314.45	225.00	303.31	62.07		63.37	46.59	526.27
1893	321.04	205.57	303.31	98.50		64.10	50.68	537.10
1894	333.30	199.58	316.45		535.05	67.01	56.25	487.69
1895	340.22	199.07	316.53		414.56	60.67	54.02	532.22
1896	347.59	279.67	337.36		411.45	46.81	46.78	500.19
1897	359.85	233.09	342.65		451.50	41.46	45.12	524.73
1898	406.27	282.21	387.53		440.99	47.90	52.44	551.82
1899	486.32	323.79	455.25		532.72	60.93	54.84	595.15
1900	456.75	295.93	414.67		454.65	57.94	62.80	526.67
1901	390.39	302.63	369.97		436.69	54.55	40.35	531.38
1902	550.96	353.71	501.47		660.09	71.78	41.45	520.33
1903	599.94	389.29	531.17		711.36	74.48	62.80	822.42
1904	571.93	323.63	514.19		674.58	52.33	45.06	586.33
1905	557.23	360.74	497.04		604.14	54.27	49.20	718.13
1906	605.55	270.48	503.72		646.31	53.89	43.22	720.95
1907	623.49	354.07	537.42		776.35	51.48	50.43	724.46
1908	554.85	327.48	486.17		656.80	47.27	50.48	684.12
1909	503.78	328.74	449.94		664.57	67.56	55.64	683.73
1910	442.23	317.18	367.74	563.32	667.53	50.64	53.98	740.02
1911	453.57	351.41	399.53	578.72	663.70	25.45	56.58	738.03
1912	379.36	304.22	343.16	466.24	606.54	56.93	52.95	698.38
1913	420.02	275.97	333.18	513.17	667.27	57.73	57.10	807.04
1914	433.12	302.82	342.81	579.37	692.10	64.25	61.51	798.68
1915	409.16	299.44	336.78	535.94	672.49	47.00	48.70	784.46
1916	464.22	329.06	369.63	663.88	817.02	48.87	58.72	821.72
1917	475.01	315.52	354.03	686.31	772.45	41.23	56.65	840.04
1918	501.91	330.08	372.06	626.75	778.27	49.07	71.70	863.04
1919	501.91	312.95	349.44	622.21	831.01	52.61	69.23	888.57

出典：歴年海関報告　Reports on Trade at the Treaty Ports 1868−1885 part Ⅰ p.10, Retens of Trade and Trade Reports 1886−1905 part Ⅰ pp.10−13, Retens of Trade and Trade Reports 1906−1911 part Ⅰ pp.27−30, Retens of Trade and Trade Reports 1912−1919 part Ⅰ pp.78−96

は早くから機械織りの絹織物に転換したのに対し、フランスの伝統絹織物は手織りが残り、中国生糸はフランスを主な市場としていたが[66]、横糸のみ生糸の交織布の登場によって、市場も狭まった[67]。1870年代にはヨーロッパの蚕病も治まり、これも市場を狭める要因となった。1870年代前半の生糸価格急落の原因はこのようにさまざまな理由があげられているが、ここで注目したいのは、交通・通信技術の発達による情報の大転換である。1860年代後半には、香港上海銀行の設立など外商の活動の条件が整い、それまでの大商社に加えて、中小の外商が活動できる条件ができたが、外商間の過当競争によって生糸市場は中国側の売手市場となった。それが外商の買手市場に逆転したのは、交通面で1869年のスエズ運河の開通があり、情報通信面では、1871年に上海とヨーロッパの電信が直結した影響が大きい。上海の市況がリヨンの市況と連動するようになり、競争相手の日本の登場もあって、上海は生糸価格の決定権を失った。このことが輸出の転回点の大きな要因と考えられる。1880年代には上海でも器械製糸業がおこり、生糸と並んで輸出の太宗であった茶の輸出も大転換した[68]ことをあわせ、中国の貿易構造全体が大転換する画期となった。胡光墉が生糸を買い占めて糸価を吊り上げようとした時は、糸価が低迷してから10年も経っており、かれの意図は遅きに失していた。迫りくる清仏戦争や、イタリア養蚕業が予想に反して豊収であったことなどの情報にも疎かったのかもしれない。胡光墉が外商と対抗しようとしたとしても、かれのやりかたはもう古くなっており、かれは新しい産業の創設の方には向かわなかった。投機の失敗ということがかれの破綻の理由として大きい。

おわりに

胡光墉が古い公行商人と新しい商人の中間の存在であるというスタンレイの見解はさきに紹介した。胡光墉は新しい生産企業に参入する能力も意志もなかったとかれは言う[69]。胡は左宗棠の進める船政局や洋務にはかかわったが、自ら近代企業をおこすことはなかった。この点で、かれの後継者と推測される厳信厚と異なっている。すなわち、官金の送金を担っていた胡光墉の破産は、その後の官金送金をどうするのかという問題をひきおこしたが、岡本氏は厳信厚が引き継いだことを想定しており[70]、佐藤究氏は厳信厚の子の厳子均の源豊潤票号の倒産と、1910年のゴム株式恐慌を論じて、厳信厚の設立した源豊潤票号の公金送金の実態について分析している[71]。左宗棠の系列の胡光墉から、かれによって世に出ながら李鴻章の幕府にあった厳信厚が公金送金の事業を引き継ぎ、中国最初の銀行である中国通商銀行を創立したのは厳信厚であった。かれについてはかつて論じたことがあるが[72]、その官金送金も含めて、厳信厚について、改めて検討したい。

註

(1) 孫岩編著『胡雪岩与曽国藩的智慧』中国物資出版社　2005）
(2) 胡雪岩等原著・王秋萍評釈『中国商道：紅頂商人胡雪岩』（当代世界出版社　2005）
(3) 鄧九剛『茶葉之道－欧亜商道興衰三百年』（内蒙古人民出版社　2000）
(4) 李文澄『胡雪岩』上下（北京図書館出版社　2002）

(5) 同上　上「前言」
(6) 同上　下　頁820－821
(7) C.John Stanley,Late Ch'ing Finance: Hu Kuanng-yung As an Innovator（胡光墉与晩清財政）Harvard University Press, Cmbrige, 1970 pp. 6 - 7
(8) 「跑街」の職務と地位に関しては、拙稿「秦潤卿と上海の銭荘　南京国民政府の成立まで」筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部『論叢』17（2006）123～124ページ参照
(9) 祈舟「晩清商業巨子胡雪岩」経済日報『中国企業家』1991- 7　頁49
(10) North Cina Herald, Aug. 3 1878
(11) 趙爾巽等撰『清史稿』巻395　列伝182「王有齢」（中華書局　1977）頁11784
(12) 祈舟　前掲論文　頁49
(13) 杭州市地方志編纂委員会『杭州市志』（中華書局　1995）頁27
(14) 前掲『清史稿』巻395　頁11785
(15) C.Johon Stanley.,op.cit.,p. 10
(16) C.John Stanley,.op.cit.,p. 12
(17) 前掲『清史稿』巻412　列伝199「左宗棠」頁12026
(18) 『左宗棠全集』奏稿３「浙省購置義烈遺阡請列入祀典致祭並蠲免地税片」７月20日（岳麓書社　1987）頁82-83　なお、左宗棠の研究で基本史料とされているのは『左文襄公全集』であるが、1987年に刊行された『左宗棠全集』では、『左文襄公全集』を底本に、「奏稿」については「朱批奏折」などによって校訂したり、「書信」では「左宗棠未刊書牘」などによって増補している。本稿では、この新しい全集版を参照することにする。
(19) 『左宗棠全集』奏稿３「請賞加胡光墉葉文瀾両員布政使銜片」同治５年９月１日　頁119-120
(20) 『左宗棠全集』奏稿３「擬機器雇洋匠試造輪船先陳大概情形折」同治５月13日　頁80-85
(21) 前掲『清史稿』頁12027
(22) C.John Stanley,.op.cit.,p. 13
(23) 『左宗棠全集』奏稿３「詳議創設船政章程購器募匠教習折」同治５年11月５日　頁337
(24) C.John Stanley,.op.cit.,p. 16
(25) C.John Stanley,.op.cit.,p. 52
(26) C.John Stanley,.op.cit.,p. 53
(27) 岡本隆司『近代中国と海関』（名古屋大学出版会　1999）314～315ページ
(28) C.John Stanley,.op.cit.,pp. 48-49
(29) 岡本隆司　前掲書　328～331ページ
(30) 『左宗棠全集』書信２「答楊石泉」頁360
(31) 『左宗棠全集』書信２「答胡雪岩」頁472
(32) C.John Stanley,.op.cit.,p. 51
(33) 『申報』光緒元年２月６日（1875年３月13日）「中国又告貸於西商」
(34) 『左宗棠全集』書信３「与胡雪岩」頁169
(35) C.John Stanley,.op.cit.,p. 52
(36) 祈舟　前掲論文　49頁
(37) 秦翰才自蔵手稿「左宗棠与朋僚」第４頁　中国人民銀行上海分行編『上海銭荘史料』（上海人民出版社　1960）頁48
(38) C.John Stanley,.op.cit.,p. 31
(39) 濱下武志『中国近代経済史研究』（汲古書院　1989）336ページ
(40) C.John Stanley,.op.cit.,p. 33

(41) 濱下武志　前掲書
(42) ibid
(43) 岡本隆司　前掲書　356ページ
(44) 前掲『上海銭荘史料』頁48
(45) 前掲『杭州市志』頁28
(46) 祈舟　前掲論文　頁50
(47) BPP FO Miscellaneous Series1884China. Shanghae p. 232
(48) China Maritime Custom,Returns of Trade and Reports,Chinkiang, 1883 p. 146
(49) 濱下武志　前掲書　305・307ページ
(50) 同上　306ページ
(51) 鈴木智夫『洋務運動の研究』（汲古書院　1992）35ページ
(52) 祈舟　前掲論文　頁51
(53) 蒸気力など動力を用いて生産される生糸を器械糸と呼んでいる。器械と言っても、動力が器械の回転にまでは用いられていないものも含まれる。これに対して在来の生産方法によるものを座繰糸と呼んでいる。しかし中国においては、座繰だけでなく早くから足踏機が使われていた。そこで本稿では在来技術によるものを「土糸」ということにする。
(54) 拙稿「清末湖州の蚕糸業と生糸の輸出」『中嶋敏先生古希記念論集』下巻（汲古書院　1981）
(55) 同上　531ページ
(56) 杉山伸也「幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討」『社会経済史学』45- 3 （1979）
(57) 拙稿同上　532～533ページ
(58) 同上　530ページ
(59) 楊纓「五港開港と江浙生糸市場－19世紀中葉中国の世界市場への統合過程をめぐって－」『東洋学報』85- 1 （2003）
(60) 濱下武志　前掲書　133・210ページ
(61) 拙稿　前掲書　542ページ
(62) 古田和子「近代製糸業の導入と江南社会の対応－日中の交流と比較を含めて－」平野健一郎編『近代日本とアジア　文化の交流と摩擦』（東京大学出版会　1984）
(63) 『申報』同治11年４月16日　「法国論湖糸市情」
(64) 『申報』同治12年６月１日　「西商論湖糸夾雑」
(65) 『申報』同治12年６月11日　「湖糸減価滞銷説」
(66) 曽田三郎『中国近代製糸業史の研究』((汲古書院　1994）74ページ
(67) 鈴木智夫　前掲書　292ページ
(68) 拙稿「近代中国の茶貿易－輸出の「漸落期」を中心に－」『中国近現代史論集　菊池貴晴先生追悼論集』（汲古書院　1985）参照
(69) C.John Stanley,.op.cit.,p. 6
(70) 岡本隆司　前掲書　366～368ページ
(71) 佐藤究「清末の源豊潤票号による為替送金について－上海ゴム株恐慌と源豊潤票号の倒産－」『九州大学東洋史論集』27（1999）
(72) 拙稿「清末上海における寧波幇の活動」筑紫女学園大学・短期大学『国際文化研究所論叢』11（2000）

（はた　これひと：アジア文化学科　教授）